

「講堂映画会」の子どもたち

吉田 ちづゑ

この論文は、60年まえ、京都府舞鶴市の1小学生が描いたクレヨン画の題名、「講堂映画会」への関心から明らかにされた、日本最初の学校映画教育の創設過程と、その教育内容である。

二部構成の第一部では、この巡回映画教育が企画された理由として、第一次大戦後の西洋思想の流入に対処した、内務省を中心とする全国民の思想統制をまず挙げ、その教化方法に初めて映画が使われたとしている。文部省は、小学生からの国民教育が肝要として、小学校巡回の「講堂映画会」を企画し、昭和3年3月から実施した。視聴覚教育の創始である。この巡回映画の具体像は、次の2点により明らかにされている。

①全国ほぼ一律のフィルムで巡回した「講堂映画会」は、その運営のすべて一プログラム選定、映画の解説書作成、映写後の反応調査、小学校教師の映画教育講習会等一を、毎日新聞社が担った。なぜ、民間企業が国家の教育に参画できたのか。

②15年間の巡回プログラム（その教育内容）。

「講堂映画会」は、昭和13年以降、稲田達雄・波多野完治らが、児童心理を探究した映画をめざし、初の障害児問題を扱った佳作も発表する。だがその方向は、国家総動員体制下の教育目的と大きく齟齬することになる。

第二部では、旧軍港都市舞鶴の2つの小学校に現存する日誌から、昭和2年度から急に始まった映画教育の実像が明らかにされている。明倫小学校の熱心な文部省推薦映画「引率観覧」と、新舞鶴小学校の「講堂映画会」への初年度入会が対立的に発展し、12年以降、「時代の要請」により明倫校方式が主導権を握る過程を明らかにしている。

結語では、昭和9年、映画の効果をめぐっておきた、「動く掛図論争」こそ、映画の本質を問う論争として位置づけている。「映画は動く掛図に過ぎぬ」に対し、「映画の編集という芸術性」を主張した側が勝者となったこの論争について、編集は映画の芸術性ではあるが、編集者の目的如何で、映像の種類と量を選択しうる映画の危険性を指摘し、著者はこれを、現在の問題であると結論している。